

2. 研究成果

A. 計画研究

課題 1

計画：1-1

宮城県におけるニホンザルの分布、個体数の現況と歴史の変遷およびその要因についての研究

伊沢 紘生（宮教大）

遠藤 純二（東浜小）

庄司由美子（宮教大）

宮城県下のニホンザルについて、過去の分布の復元や、分布の現状、群れの数や個体数の変動等の調査をこれまで行ってきたが、本研究3年目の今年には成果のとりまとめを念頭に置きつつ、概略以下の調査を行った。

① 県下全域のサル生息地について踏査を実施し、7年前にまとめた「宮城県のニホンザルの群れの分布と頭数」（伊沢・遠藤，1987）の再点検と考察を行った。この結果は『宮城県のニホンザル』第5巻にまとめ公表する予定である。

② より古い時代、すなわち明治時代より以前の県下におけるサルとヒトの関わりについて、古文書の調査、民話・伝承の調査、聞き取り調査等を実施した。この結果は『宮城県のニホンザル』第6巻にまとめ公表する予定である。

③ 前2年間継続した奥新川、二口、川崎の3地域における群れの個体数変動調査を本年度も実施した。この結果は①で記した報告書の中でまとめを行う予定である。

④ 金華山島に生息する5群については、前年度にひとまずの整理を済ませたが、本年度もそれらに関する継続調査を実施した。今回の結果も含め、③と同様に①で記した報告書の中でまとめを行う予定である。

⑤ 金華山ニホンザル個体群の個体数増減に深く関与していることがこれまでのまとめで明らかになった食物について、その生産量を知る目的でシード・トラップを50箇所設置しての資料収集を、前年度に引き続き本年度も実施した。この調査はもうしばらく継続させる予定であるが、同時にこれまで10年間のニホンザルの食物について全資料を現在整理中であり、この食物リストと食物生産量

についての分析結果とを併せ『宮城県のニホンザル』第7巻にまとめ公表する予定である。

⑥ 宮城県下でも猿害が大きな社会問題になりつつあり、本年度も相当数のサルが七ヶ宿町を中心に駆除目的に射殺された。いずれ本格的に対処しなければならないと考えているが、本年度はとりあえず猿害の発生状況や被害の実態などに関する情報収集を行った。

計画：1-2

熊本県全域にわたる猿害の実態把握

— 集団の生息調査を兼ねて —

藤井尚教（尚綱大）

熊本県における野生ニホンザル集団の分布状況は、1982年からの調査でほぼ判明しており、球磨郡川辺川流域と阿蘇郡南外輪山一体が二大生息中心地であり、これら以外に球磨郡の錦町を中心とする大平山一带と、球磨川右岸の球磨村大槻周辺、八代郡泉村白岩戸に集団が生息している。阿蘇郡一宮町には、捕獲飼育後の脱走集団がいる。

本調査では、県下全域の猿害状況を把握し、これまでの生息資料と比較検討しようとした。

県庁、各県事務所そして各市町村の担当課の協力のもとに1年間の猿害調査をスタートさせた。

相良村では平成3年度に椎茸2,205kg、栗75? kg、タケノコ145kgの被害が報告されたが信頼性は低い。五木村では270万円の栗被害のみが出たがこれもすべてではない。他の市町村でも同じ結果で全体として猿害実態の把握に関してはどの市町村でも熱意は感じられず、結果的には私と県が空回りして、信頼性が低くかつ部分的な猿害資料しか得られず失敗に終わった。

熊本県ではこれまで稲の被害は確認されていなかったけれども、相良村で中の原と高尾野、阿蘇郡高森町冬野の3地域で被害が起きたことは注意を要する。もしこれから稲の被害が増加するなら猿害はさらに難しい問題となるであろう。

詳細な猿害実態が把握できなかったその一方で、猿害調査に付随して、野生ザル集団等の生息状況についての新しい知見となる重要な資料がいくつも得られた。

相良村の四浦西グループが平成3年8月には村境を越えて山江村の大川内や萩の栗園を荒らすようになった。阿蘇郡久木野村では平成3年7月に